

令和7年 春季俳句講座

「第一句集を読む―師系を超えて(8)」

第2回 森賀 まり

『含羞』 石川桂郎

「含羞のありか」

石川桂郎は俳人の他、小説家、編集人としても

知られる。人柄においても魅力的な人だったようだ。

『含羞』の作品からその人物像を探ってみたい。

森賀 まり 略歴

1960 愛媛県生まれ

1983 「青」（波多野爽波主宰）入会

1991 波多野爽波死去により「青」終刊

1994 「百鳥」（大串章主宰）創刊と同時に入会

2000 「ゆう」（田中裕明主宰）創刊、入会

2005 田中裕明死去により「ゆう」終刊

2006 「静かな場所」創刊

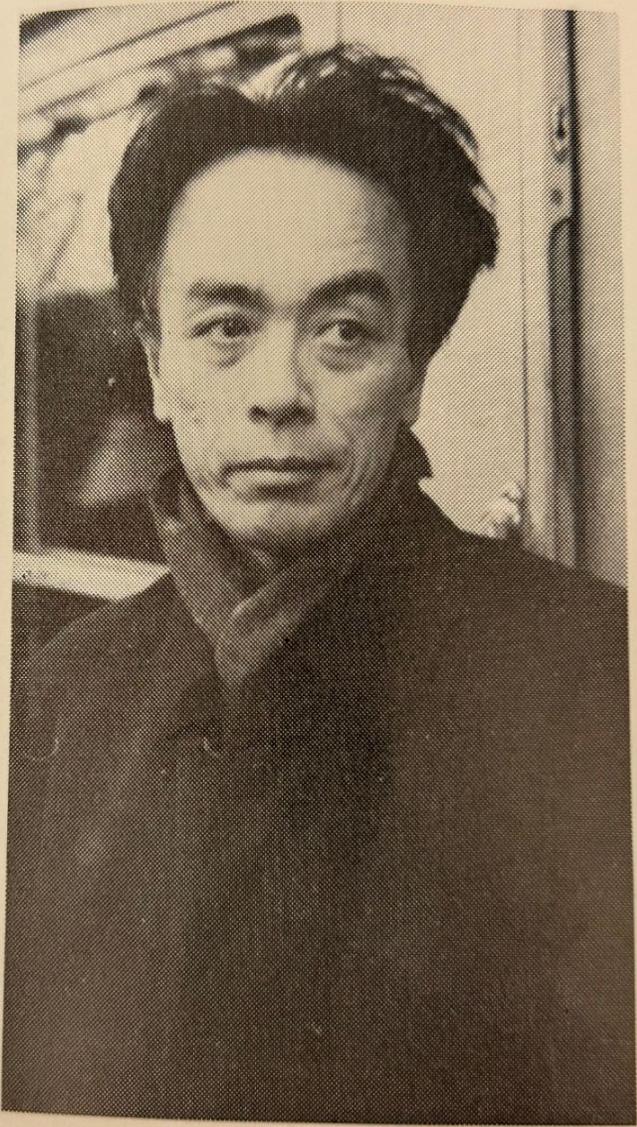
句集『ねむる手』、『瞬く』（俳人協会新人賞）

2022『しみづあたたかさをふくむ』（俳人協会賞）

他に詩集『河へ』、田中裕明との共著『癒しの一句』

現在 「百鳥」「静かな場所」同人

俳人協会幹事、日本文藝家協会会員



石川桂郎 昭和28年 44歳

桂郎忌

これを憎みこれを手繰りぬ枯かづら 手塚美佐

句集『昔の香』

石川桂郎 年譜

明治42(1909) 東京芝三田生まれ。本名一雄。

「清々軒」(のち「石川理髪店」に改称)の長男。

進学を志したが成らず、理髪業見習いとなる。

大正14(1925) 肺浸潤(結核)となる。

昭和11(1936) 父死亡。石川理髪店を継ぐ。

昭和14(1939) 浅賀きみと結婚。

昭和15(1940) 石川理髪店を廃業。

昭和16(1941) 長女路子死亡。

昭和19(1953) 応召、即日帰郷。次男藍二死亡。

昭和21(1956) 東京都町田市鶴川村能ヶ谷に転居。

昭和27 この頃から「俳句研究」、「俳句」など俳句雑誌編集。

昭和30(1955) 少年時代の結核が再発、左目の視力を失う。

昭和31(1956) 肺葉切除手術を受ける。

昭和49(1974) 食道がん発覚。

昭和50(1975) 食道がんにより死去。十一月六日66歳

石川桂郎 年譜〔俳歴、作家歴〕

- 昭和9 杉田久女門の宮本正子に、俳句を勧められる。
「玉藻」に投句、入選。
- 昭和10 書店で見かけた「馬酔木」の石田波郷作品に魅せられる。
- 昭和12 波郷が「鶴」を創刊、創刊号より投句。
- 昭和13 「鶴」投句者から初の同人に推される。
- 昭和14 「鶴」に掲載された「蝶」が「文芸春秋」編集長永井龍男に注目され、他2編とともに同誌に掲載。
このころ、石塚友二を介し、横光利一に師事。
- 昭和17 石田波郷、加藤楸邨らと「馬酔木」を去る。
- 昭和18 短編集『剃刀日記』（協栄出版社）
入隊の波郷の髪を切る。
- 昭和20 石田波郷帰還。
横光利一亡くなる。
- 昭和23 波郷らとともに「馬酔木」に復帰、同人となる。
- 昭和28 「鶴」復刊、編集長。
- 昭和29 『妻の温泉』（俳句研究社）。
- 昭和30 『妻の温泉』が直木賞候補となる。
- 昭和31 第1句集『含羞』（琅玕洞）。
- 昭和36 俳人協会設立。「佐渡行」他にて第1回俳人協会賞。
- 昭和39 「風土」主宰となる。
- 昭和44 第2句集『竹取』（牧羊社）。石田波郷亡くなる。
- 昭和46 「鶴」同人を退く。
- 昭和48 第3句集『高蘆』（牧羊社）。『俳人風狂列伝』（角川書店）。
- 昭和49 『俳人風狂列伝』にて第25回読売文学賞。
- 昭和50 「昭和49年度俳句作品およびこれまで全業績」により
第9回蛇笏賞。11月7日食道がんにより死去、66歳。
- 昭和51 遺句集『四温』（角川書店）。

石川桂郎の著作

【俳句】

- ・第1句集『含羞』 昭和31 琅玕洞、
昭和47 風土俳句会
- ・『石川桂郎集』へ私版・短詩版文学全書⑭へ
昭和43 八幡船社
- ・第2句集『竹取』 昭和44 牧羊社
- ・第3句集『高蘆』 昭和48 牧羊社
- ・遺句集『四温』 昭和51 角川書店
- ・『石川桂郎集』へ脚註名句シリーズへ手塚美佐編、
平成6 俳人協会
- ・『石川桂郎の百句』南うみを著
令和4 ふらんす堂

【小説など】

- ・『剃刀日記』 昭和17 協栄出版
- ・『妻の温泉』 昭和29 俳句研究社
令和6 講談社文芸文庫
- ・『俳人風狂列伝』 昭和48 角川書店
昭和49 角川選書
平成21 角川選書オンデマンド版
平成29 中公文庫
- ・『残照』 昭和51 角川書店
- ・『面会洒舌』 昭和53 東門書屋

『含羞』（鶴叢書第七篇）（琅玕洞）昭和31年刊（47歳）

昭和13年～31年（19年間） 3句組 453句

（略）句集は私がひそかに望んでいた楠本憲吉氏の琅玕洞が引き受けてくれた。第二句集など考えてもいない私は、それまで出版されている琅玕洞の装釘の好みに魅せられ、美しい句集を一冊のこしておきたかった。

（「酒の器」現代俳句大系 月報 第4号）

序

石川桂郎とは二十年来一緒に酒を飲み句を作つて来たが、その作句に関しては相共に言葉を交したことはない。

今や、彼の俳句は類のないものだ。俳壇の悪しき慣ひであるエピゴーネンもない。現代の俳壇では彼だけが唯一人の自由な俳人である。

昭和三十一年・晩秋

石田波郷

跋

中村草田男

「俳句性」のありがたが、「挨拶の」要素のあたりに指摘されたことがある。それに基づけば「含羞」とは、必竟、「挨拶」せずには居られない心が、ためらひの余り自らの心へ挨拶する「そのこと以外にない」。

石川桂郎氏の上に「含羞」のただよひが強く認知されることを発言したのは、あるひは私が最初だったかもしれない。『剃刀日記』の出版の席上であつたから、もう今日からは何年前になるであらう。その折に私は、「極度に聡明であつて、同時に極度に純粋な心の持ち主があつて、人性の動きのままに、先づ自己と同様の『純粋さ』を他人の上に無辺際に予想し予期するときには『含羞』の現象が惹きおこされ、しかもそれがはかなくも裏切られたときに、聡明さからくる自立の誇りと弾力とが、『タンカ』となつて発動せずにはいられないのであらう。(後略)

『含羞』作品

- 1 激雷に刺りて女の頸(えり)つめたし 昭和13
 - 2 花の雨みごもりし人の眉つくる 昭和14
 - 3 よその子の歩める霧に立ちどまる 昭和16
 - 4 栗飯を子が食ひ散らす散らせよ 昭和21
 - 5 餅腹の汚さゆるせ二日酒 昭和22
 - 6 あまり寒く笑へば妻も笑ふなり //
 - 7 師の声のある日の声を冬の鴝 //
 - 8 入学の吾子人前に押し出だす 昭和23
 - 9 昼蛙どの蛙のどこ曲らうか 昭和24
 - 10 昼寝子や生れし日のごと髪濡れて 昭和26
 - 11 太宰忌の螢行きちがひ行きちがひ //
 - 12 水嵩の増しくる如く芹洗ふ 昭和28
 - 13 朱きもの病む子に一つ金魚吊る //
 - 14 戦なき切山椒の香なりけり 昭和29
 - 15 綿虫のはたしてあそぶ櫟みち //
 - 16 遠蛙酒の器の水を呑む 昭和30
- 石田波郷 選 12句(「俳句」三十七年二月号)
- 1 水嵩の増しくる如く芹洗ふ 昭和28
 - 2 畦に避けて若き毒消売にほふ //
 - 3 綿虫のはたしてあそぶ櫟みち 昭和29
 - 4 柚子湯して妻とあそべるおもひかな //
 - 5 母が出て抜くにもかばひ素人葱 //
 - 6 遠蛙酒の器の水を呑む 昭和30
 - 7 座右の書の「湖畔手記」にも蠹魚(しみ)の虫 //
 - 8 捨て犬が追へば蝗の散りにけり //
 - 9 噴水の音にもある間やチエホフ忌 //
 - 10 窓が嵌む野分走りの通ひ妻 //
 - 11 小綬鶏が地走る先や露葎 //
 - 12 手鏡にわが家を結ぶ雪の畦 昭和31

「石川桂郎のこと」 石田波郷

(略)彼はすでに「含羞」といふ句集を持つてゐて稀有の個性をのびのびと生かした独自の苦境を認められたのであつて、彼が「もはや新人ではない」といふのも当然なのである。彼は三田聖坂の石川理髪店の跡取り息子で下町の職人気質をつま先までうけて育つた。ダンディで気が弱く、向つ気が強く、てれ屋である。その他いろいろの属性をふくめた江戸つ児なのだ。だから彼の俳句を一言にしていへば庶民的ダンディズムとでもいへようか。もちろんその中に桂郎の個性がまぎれなく開花してゐるのである。(略)さきに庶民的ダンディズムといったが、さう限つてしまふこともあるまい。「含羞」から興味ある句を抜いてゆくとときりがない。ここで彼の俳句に於ける個性の開花は見事であり十分である。「含羞」そのものが当然何らかの俳句賞に相当するのである。ただ当時俳壇に「含羞」を顕彰すべき賞がなかつたにすぎない。また彼の随筆の持味そのままの、俳壇に於ける、といふより俳壇酒席に於ける彼の言動に幻惑されて、彼の俳句業績はまじめに評価されてゐなかつたのである。これは彼の罪か、俳壇に目がなかつたのか、どちらとも断ずることはできないが、どこかに怠慢があつたやうだ。

(「俳句」昭和37年2月号 俳人協会賞受賞特集)

「孤独な素顔」

細川加賀

(略)石田波郷は、「彼の句は江戸つ子の職人氣質を失はない文人としての含羞の文学で、窮乏を詠みながらも市井人のユーモアをただよはして、独自の句風を生み出している。」と述べ、中村草田男は「挨拶せずにもられない心が、ためらひの余り自らの心に挨拶する」のが「含羞」だと説く。要するに、世間に対すると同時に己の心に対する「はじらひ」「はにかみ」が桂郎俳句を独自のものにしてゐるのである。

(前出へ入学の吾子人前に押し出だす)この句、父子含羞の

図と言ってよかろう。(略)

(「鶴」昭和51年3月号)

(前略)私が、石田波郷の作品に触れ、この人こそ終生の師と心にきめたのは、三田聖坂に理髪店を営んでいた二十五、六歳の頃、慶應義塾通りの福島屋書店に積まれた「馬酔木」の立ち読みに始まったのである。それまで一、二の結社誌でしか俳句の世界を知らなかった私にとって、波郷作品の深さ幅に瞠目したといえ、初心の私の驚きが示せると思う。「鶴」創刊と同時に会員となり、やがて句会に出席したが、波郷選に入る句は情けないほど少なかった。そうして波郷の歩む木道は見失わず、枝道枝道と迂回するような句を作ったのは、師の作風(型)をただまねているだけが能ではないと気づいたからである。私は私に自分の面(つら)を作れ——そんなかけごえをかけて、師に返す恩はそれを外しないと信じ、『含羞』をその意味で一方的といえはいえるかもしれない默契の句集とした。

句集名の『含羞』は中村草田男氏の言葉から私が引いて、波郷氏が賛成し決定したものである。

『剃刀日記』（烏有書林）

烏有書林版 解説 七北数人

（略）1956年桂郎は第一句集『含羞』を刊行した。それまでの二十年近い句作から自選したものである。こういうタイトルをストレートすぎると嫌う人もいたようだが、桂郎には、もっと深い思いがあっただろう。「文化と書いて、それにハニカミといふルビを振る事、大賛成」「私は含羞で、われとわが身を食つてゐます」と書簡に書いた太宰治に通じるものだ。

令和7年 春季俳句講座

「第一句集を読む―師系を超えて(8)」

◆第1回講師―山西 雅子

動画配信日 4月15日(火)

◆第2回講師―森賀 まり

動画配信日 4月22日(火)

◆第3回講師―中村 雅樹

動画配信日 4月29日(火)

◆第4回講師―横澤 放川

動画配信日 5月6日(火)